

松阪市議会  
議長 中島 清晴様

平成 30 年 8 月 28 日

市民クラブ  
楠谷さゆり

以下の通り、視察を致しましたので、ご報告します。

## 犬 山 市 議 会 議 長 と の 面 談

視察日	平成 30 年 8 月 22 日(水)
視察先	愛知県犬山市 犬山市議会議長室
視察事項	ビアンキ アンソニー議長の議会改革について
対 応	ビアンキ アンソニー 犬山市議会議長 柴山一生 犬山市議会副議長

犬山市役所 議会事務局

〒484-8501 愛知県犬山市大字犬山字東畑 36 本庁舎 6 階

電話 (0568)44-0307



## 1. ビアンキ・アンソニー議長の略歴

1958年米国ニューヨーク・ブルックリン生まれ。ニューヨーク大学に進学し、映画製作を専攻。卒業後、ハリウッドでテレビ番組制作に携わる。88年ホームステイで初来日。89年に外国語指導助手(ALT)として再来日。96年、英語講師として犬山市と契約し3度目の来日。2002年、日本国籍取得。03年、犬山市議初当選。当選回数4回。17年5月から議長。国際交流団体「B・ブリッジズ」代表、木曾川日米協会副会長、犬山国際交流アドバイザー。空手2段。著書に「前例より前進―青い目の市会議員奮闘記」(風媒社)。

## 2. 面談の目的

本年1月24日、犬山市国際観光センターにて、ローカル・マニフェスト推進地方議員連盟主催の「地方創生時代の政策と議会のあり方を学ぶ」研修会に参加した際、ビアンキ議長の「前例より前進、議会機能向上」という演題の講演で多くを学んだ。

またその後、アメリカでの地方議会制度について知る機会があり、それと考え合わせると、ビアンキ議長の意図する地方議会における民主主義のあり方が、より理解できる気がした。

ビアンキ議長が講演会で述べたことは、主に次のようなことであった。議員同士が議論をしないと、議会として物事を決められない。物事を決めていくには議員間討議が重要である。議員間討議は、市民の意見を吸い上げて、市民のニーズや希望を反映できるようにする必要がある。市民の意見を吸い上げるには、その場と方法を増やすことが求められるので、議長になってから「市民フリースピーチ制度」として市民が議場で、全議員を前に5分間自由に発言できる制度を新設した。この制度の特徴は、誰でも参加しやすい時間帯とし、年齢制限は無く、意見は議員間討議に採り入れること。こういった市民参加型のやり方は、アメリカの流儀を採用したものである。

そこで、このフリースピーチ制度のこれまでの成果や、他にも市民参加の機会としての「議長オープンドアポリシー」には市民からどのような要望が寄せられたのか、直接尋ねてみることにした。

### 3. 第1回市民フリースピーチ制度の成果

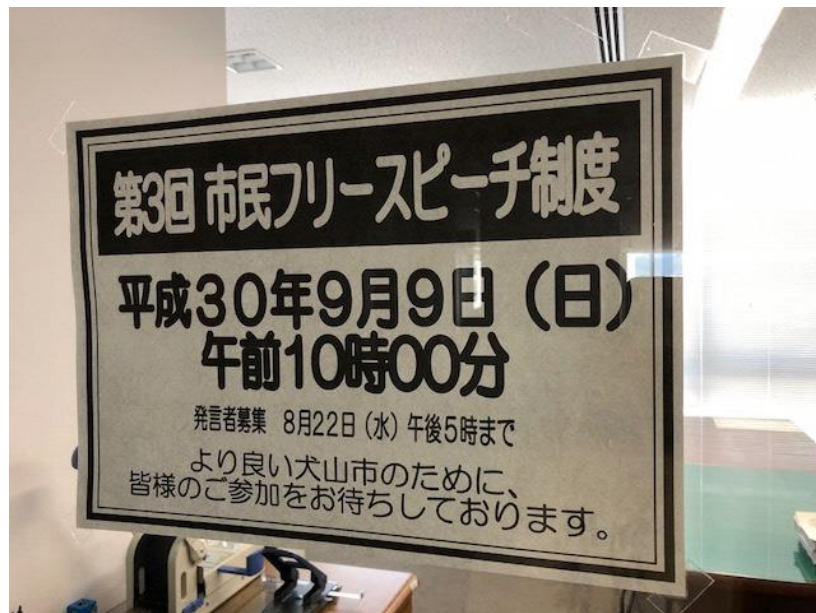
3月定例会の開会日2月28日午後6時半から、計7人の市民がスピーチを行った。夜の開催だったこと、初めての試みであったことで、普段は人の少ない傍聴席が満席となり、溢れた市民は議場外のモニターで見るようになった。

スピーチの内容は、市政に対する批判や苦情の類は無く、建設的な提案が多かった。例えば、2025年問題への解決策として介護予防のためにダンベル体操を採り入れてはという提案、犬山市名に関する全国発信サミット開催の提案、都市計画道路蠟屋長塚線の早期実現について、投票日アップのために期日前投票所を増やして欲しいという要望などである。

これらについて全員協議会で議員間討議を行い、各会派に持ち帰る議題については後日、それぞれの討議結果を「議員からの意見」としてまとめた。最終的に採決となった議題もあったという。その後市の担当課と協議をして、具体的な方策を検討すると結論付けたものもあれば、シティプロモーションの実施へと繋がった提案もあった。

今後の課題として、市民フリースピーチに応募する人が比較的高齢の男性に偏っていたので、若者や女性のスピーカーを増やしていけるPRの仕方を考える必要がある

こと。また、フリースピーチで意見を聴取した後のプロセスが市民にわかりにくいため、フローチャートを作成することにしたという。さらに、議会の中で今でも全ての議員がこの制度に賛同しているわけではないこと。反対派の中には、市民が直接行政に意見し、その意見を行政が採り入れていくなれば、議員は不要となるという危惧を抱いている議員もいるという。これについてビアンキ議長は、それは市民と行政を結ぶ議会の役割と権限を理解していない者の誤解であると断言する。また、市民は議会で自分の意見を言うことで議会に親しみを持つことができるし、「議場は民主主義の教会である」という議会の重みを感じることができるとした。



#### 4. 議長オープンドアポリシーとは

これも海外では、大学教授の研究室にも自由に誰でも面会できる時間帯が表示されていることを参考に始めたものであるという。しかし実は、前山田議長の時にも提案されていたものである。現在は、毎水曜日の午後1時半から4時半まで、市民が自由に議長と話ができる。アポも取れるし、アポなしでも可能である。これまででは、多い時には市民が順番待ちで待機する日もあったという。内容は、こちらは比較的、建設的な意見というよりは、産廃ゴミが溜まっている場所があるという苦情、側溝の蓋などの要望、公園の騒音問題など、いわゆる「どぶ板」事例が多いという。それでも市民は議長に聞いてもらった、という満足感を持って帰ることができる。もちろんこれらの意見は精査して行政側に伝える。

## 5. 所感

視察などに付き物の準備された資料もなく、議長と副議長だけを前にした面談で、非常にフレンドリーな雰囲気ですべてのインタビューをさせていただくことができた。必然的になのか本当に偶然なのかはわからないが、柴山一生副議長もニューヨーク州立大学院の卒業生と聞き、犬山という地方都市が、この議長応接室の雰囲気だけでオープンで柔軟性のある市民が多いように思えるから不思議である。2代前の議長までは保守的であつたらしいが、ピアンキ議員が議長になってから全国の注目も集めるようになったことも事実であろうし、それが市民の意識を変えているのかもしれない。

フリースピーチ制度は市民だけでなく、行政側からの注目度も高いはずである。しかしながら申し込みは初回が7人の定員をオーバーして抽選になったものの、2回目は6人、9月も6人となる可能性が高い（面談日当日が締切日であった）。全国的に注目度の高い議会改革が尻すぼみにならないよう切に願うものである。また、子育てなどの課題を女性にもっとアピールして欲しいという期待があつたにもかかわらず女性や若者の応募が少ないのは、松阪市の議会報告会や意見交換会などと同じ現象になってしまうと残念である。

なお、この何十年で3回目という女性議会の開催は、午前中に市民の女性が一般質問を行い、午後には現職議員のサポートを受けて議員間討議をするという形で行い、決議もしたという。フリースピーチ制度も、議長オープンドアポリシーも、そしてこの女性議会も「入り口は異なっても出口は同じ」という表現をされたが、全て草の根民主主義の精神に基づいて市民の意見を受け入れる手段である。市民のための議会であるための試みとして、大いに参考にしたいものだ。



以上